

---

本命は・・・

カブ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

本命は・・・

### 【Zコード】

Z7997A

### 【作者名】

カブ

### 【あらすじ】

今から始まるうとする高校生活。これから先、この一人に訪れるべきコトが起こりつむ。果たして、この一人はその壁を乗り越えるコトが出来るのだろうか！？そして、その壁を乗り越えた先には、一体何が待っているのか！？その鍵はやはりこの岸田翔平という少年が握っている。果たして、神様はどんな未来をこの少年に託すのか？どうぞ、ご覧あれ！

## ～プロローグ～（前書き）

ちょっと気分転換に創つてみましたw

## 「プロローグ」

中3の冬 。

「ここは、入試に出題されるからきちんと覚えておくよ！」  
教師の声がけたましく鳴り響く。

それから数日後 。

「とうとうこの日が来たね・・・。」

「あ、ああ、そうだね・・・。」

一人の少女と一人の少年の会話が続く。

「では、試験上の注意では・・・」

試験員の人の他愛のない説明が聞こえる。

「では、以上を持つて 始め！！」

試験員の合図と共に、受験生の必死な戦闘が始まった。

会場内では、ペンを書く音、シャーペンのシンを出す音を鳴らす音、紙をめくる音など一人一人の気持ちが外部に出ている風にも見える。

「・・・はい、終了！」

この言葉と共にチーターが走るような手が一斉に止まった

。

ザワザワザワザワ・・・。

まるで、今からにも大スターの人気が現れるとでも言える程の歓喜と、

地獄の果てに突き落とされたような悲哀の表情も浮かべている者もいる。

その中でも未だに合否結果の紙と睨めつこしてゐるヤツもいる。

「え～と、596番・・・596・・・59・・・6！ あ！ あ  
つたあつた！！」

「おー、翔ちゃんや～る～！ 私もあつたよ～～。」

「おお～、愛美もあつたんだ～。いや～さすが！～！」

「ま～ね～～ えつへん」

冬の終わりを締めくくるような、この二人の会話、一つものの出会いが生暖かく見えてくる。

「新学期から、ウチ、ひりこにお世話になるんだねえ・・・。一人の少女の表情は期待に満ち溢れていたが、次第に不安という表情に変わつていった。

「なんだよ～そんな血相な顔しちゃつてや～。 ブサイクだぞ。」

「だ、誰がブサイクよ～？ これでも私、結構告られてるんだからね～？」

「でも、せつかのチャンスを台無じにしてるのよ、ビビのドイツかなあ～？」

「な、なによ～～！ 每年バレンタインデー〇個のオンパレードのアンタに言われたくないわよ～！」

「な、な、な、こ～でそれを言つか～～！」

「あ～言こますとも。 少なくとも、アンタよりアタシの方がモテ

てるつていう現実を思い知らないとね～。」

「それは・・・、はい、確かにそうですね・・・。ブサイクって言つてすこませんでした。」

「分かれば直しい でも、アンタの『チャンスを台無しに』してゐるは、誰のせいと思つてんのよ～？」

「誰つ・・・て・・・？ そのコトに理由でも？」

「ひょっとしたら・・・アンタのせいよ・・・。」

「え・・・？」

「なあ～んてね あはつ！ 翔ちゃんの顔つたら～ おつかしい～～！」

「ねえ、今の話つて・・・？」

「ああさ、合格の文字見たんだからさ～、 ひとつと、塾の打ち上げに行つちゃいましょ 早くしないと遅れちゃうよ～。」

「あ、ちょっと待つて・・・」

一人の少年は手を差し伸ばしたが、もう少女は走り出していた。

新学期から始まる新たな学園（学校）生活。 果たして、この先に待ち受けている一人の運命は・・・？



「プロローグ」（後書き）

次回も宜しく

ガチヤン。

ドアの閉める音が無音にも鳴り響く。

「今日から高校生活が始まるな～・・・。」

俺は、雲からひょっこり現われる太陽を細目で見つめながらそんなコトを思っていた。

やがて、今日から高校生活への第一歩の足を踏み入れる。

ほんの1ヶ月前までは、中学生という義務教育だった。でも高校は違う。

今から新しい事々が起につきそうな気配がして、身体がむずむずしてしじうがない。期待と不安といつも手に引き寄せながら。

俺の名前は、岸田 翔平「きしだ・しょうへい」。身長168cmと高1ではじく普通の身長だと思われる高さだ。

容姿は、自分で言うのも何なんだが、格好良くもないし、格好悪くもない。言わゆる「普通といつづだ。」

俺は、中3の秋でやっとの「桜花学園」という高校に進学する」

とを決意した。

両親は、今、宇宙旅行に行つていて、この1年は帰つてきていません。よつて、家には俺一人で住んでいふといふわけになる。

だから、毎日コンビニ弁当といつ手で済ましてくる。そして、栄養が偏つた食事を取つてゐるのだ。

でも、家に一人しかいないおかげで、受験勉強にも集中しやすかつた。だから結果こうなつたと言つてもよいと思つ。

「おっしゃいいい！ もう、翔ちゃんつたら、ホントに相変わらずねえ～・・・。もう高校生なんだし、そんなんだとマシな大人になれないよ？」

コイツは俺の幼馴染の、華恋 愛美「かれん・まなみ」。小・中と一緒に学校に通つてた。俺のコトを「翔ちゃん」とか「アンタ」とつて呼ぶことが多い。

容姿は、言つまでもなく、むつむつやくちや可憐い。この俺がこんなやつと絡んでいいのか？ と思つていいの可憐ただ。

田はぱつちつとい重型になつていて、まつ毛も少し長い。髪の長さは伸びしたら肩ほどにまであり、いつもはピンク色のゴムをはめていてツインテール型にしてくる。

口元を見るとキラキラと輝くような感じであり、少しエロティックみたいか、何人の男性を魅了しても可笑しくはないという感じをしている。

スタイルはまづまづの安定感であり、慎重は158cm。至つて普通の少女だ。

外見を見ると、癒し系と活発に動くような感じ系がする。

それと、兼ね備えた学園の制服となかなかマッチしているようにも見える。

性格は社交的で、ちょっと甘えん坊な所もある。けど、少しづがままのトコもある。でも、話していると楽しくないとは思つたことはない。あと、何かにつけて自分の言いたいことには一ツコリと笑う。そう、まるで天女の笑顔かと思うくらいの・・・。

男なら誰もがオチルと思つくらいの笑顔。 そう、彼女が最も輝いて見える時みたいな感じの笑顔。 ホントに可愛らしい。

そのせいか、中3の頃はみんなコイツに惚れてしまったのか、ほつとんどの人がアタックした。

しかし、なぜかそれを断つてしまつた。その中にもイケメン級のヤツもいたようだが・・・。

俺は、その理由がとても知りたい。なぜだが今の自分には分からぬいけど・・・。

でも彼女はそれを、決して他人に教えようとはしない。 そつ、今の時点では迷宮入りなのだ・・・。

そして、俺の場合はこの彼女とは、今友達以上恋人未満という関係を飾っている。

そりやあ、意識をしたことはないのか？ と聞かれれば、「ない」とは言いきれない。 俺が見ても可愛いと思うから。

でも、それを表にしてしまえば今までどおりの関係が崩れ落ちる・・・。少なくともそれに近い口トにもなる。

だからか、自然と普通の感情で接することが出来るようになつていい。 これがいつまで続くかだが・・・。

「悪い悪い！ ちょっとだけだけしてたら遅くなっちゃった。  
「ゴメンな〜。」

「まあ、今に始まつたことじやないけどね〜。 いいよ、今日は許したげる。その代わり、明日から遅刻したら、容赦はしないからねー！」

愛美は、人差し指を1本上方へ突き出して、二ヶコリと微笑んだ。

「ううう…。…はい、仰せのままに…。」

俺は、この笑顔にホント弱い。何でも言つ口アを開きたくななるこの笑顔・・・。ヤバすぎる・・・。恋愛感情を持つてる男性なら、も

う心臓が破裂するくらいのモノだ。

今日は、ホントにいい天気だ。太陽はもう頂上に達したのか、西に傾くスタンバイをするような感じに見える。

家から出るときには雲が結構な程あつたが、今は雲一つすらない。まるで今から起るようなコトがこの人生の中で最も価値のあるもののように…。

「じゃあ、出発しようか～！ 早くしないと入学式に間に合わなくなりちゃうからね～！」

「うん、じゃあ行こうか。」

小・中と一緒に登校していたコトもあって、少し呆れ気味の愛美だつたが、俺の変わりのない性格を目にした時にはもう普通の態度に戻っていた。

俺達二人は、お互ひの家の近くにある「そよ風公園」から学園に向けて一歩一歩足を踏み入れていった。

PHASE - 02 期待と不安（前書き）

この小説のジャンルは恋愛です。 ちょっとコメディが入ってる部分もありますが・・・。

公園から学園まで約15分くらいの距離。

俺と愛美は、隣同士で田の前の風景が学園になるまで無言で歩き続けていた。

そう、これから俺達に何を待つて居るのか？ イイコトや嫌なこと。それらがどのよしな形で、どのよにして待ち受けているのか。そういう思いながら…。

楽しみで仕方がない。しかしそれと裏腹に、やはり不安なコトも多々ある。

イイコトだけを過ごして、嫌なコトを通りすぎるのは…。というそんな虫のいことなんて言えない。

イイコトがあるから、嫌なコトもある。嫌なコトがあるから、イイコトもある。

イイコトがなかつたら、嫌なコトもない。嫌なコトがなかつたら、イイコトもない。

こういう好循環があるから人生っていうモノは成り立つ。

だから、これから先に起ることを、すなわち、イイコトでも嫌なコトでも受け入れなきゃ イケナイ。

そう、例え愛する人が出来て、その人の身に何が起つてもそれを

受け入れなきや イケナイ。

果たして、その頃の自分はそういう心を持ち合はせているのか？  
もし、持ち合わせていなかつたら

？

この季節は桜の舞う季節。

下を向いたら、歩く至る所に桜の絨毯じゅうたんが見られる。

上を向いたら、桜の木々からピンク色の花弁がひらひらと舞い落ちてくる。まるで踊り狂っているように…。

まっすぐを見たら、桜吹雪さくびせ…とまではイカナイが、まるでその道を通る人を歓迎するかのような祝福らしきな感じもしてくれる。

他の人達がこの道を笑顔を見せながら通るという行動が、何か人間に必要な何かを知らされるような想いもしてくれる。 そう、いい気分で…。

桜といえば、入学のシーズン。つまり、何もかもが「始まり」の季節。

涼しく心地よい風に揺られる桜の木も幸福のように嬉しさのあまり踊っているようにも見える。 すごく楽しそうに。

「やつと着いたね…。」

今まで無言の愛美だが、着いたときにはもう普通の状態だった。

「そうだね。ここが……。」

「桜花学園……。私達が期待と不安を膨らましているモノ。」

俺達は校門の前に立っていた。

表札には「桜花学園高等学校」と書いてある。

後ろを向ぐと、今まで歩いてきた桜の絨毯が敷かれている状態だ。周囲には俺達と同じくして登校しているヤツらや、もう到着して学校見学をしているヤツもいる。

「お、新入生か？」

俺達は校門の前に立っていた一人のメガネをかけた教師に出会った。

「はい、そうです。あの、入学式は午後2時の体育館で合りますよね？」

愛美は、もう少し何か言いたそうな表情だった。

「ああ、そうだが。」

「今何時ですか？」

「え～と……今……1時30分だな。」

「あと、30分あるね。翔ちゃんさうする？」

愛美は腕を組みながら考えていた。

「つーん・・・。どうじよつか？」

俺も一緒に腕組みなつて考えていた。

「何なら先生がニンテンドーDSを貸してあげよつか？ 脳トレの。」

先生は真顔だ。それに釣られたのはヤハリ・・・、

「先生持つてるんですかあ！？ はい！ 是非是非やりせん下さい！ 私一度やってみたかったんだあ・・・。」

「イツだつた。」

「お、おこ愛美・・・。」

「ん？ 何？ ははーん、翔ちゃんもやりたいんでしょー？ でも翔ちゃんは後後。私が先だからね！」

「でもさあ、学校の前でさあ、DSはないんじやね？ 愛美も恥ずかしいと思つし、」つちも恥ずかしいよ・・・。」

「あーん。脳年齢58歳だつた・・・。何がイケナかつたんだろー？」

聞いてね～～！ そりゃあ、前々から言つてはいたもの、何もここでやることは……。

「ん？ 何か言つた？ あ～！ 翔ちゃんもやりたかったんだね。はい、これどうぞ。1回やつてみてよ！ 脳年齢勝負勝負」

「イツ乗つ氣だ……。 しかもこのちよ～可愛い笑顔。

「・・・分かつた。 やつてやろうじやん！」

俺は最初ためらつたが、この笑顔を見て引くに引けん状態になつた。それで、腕の服をめぐつて取り上げた。

実は、俺こ～いうクイズ系ゲームとかはかなり得意な方だ。だから、もう勝負なんぞ勝つたもの同然と思つていた。

「・・・つふふふふ。 翔ちゃん脳年齢66歳だつて～！！ あはははは～！」

やつてしまつた・・・。恥ずかしい・・・。余裕をかましていたせいが、なぜかそんな結果になつてしまつた。

「お、大きな声を出すな～！ 恥ずかしいじゃねえか！」

「だつてさあ～、すんごいオカシイつて！ 66歳つてあり得ないもん・・・。 ねえ先生？」

あ、「イツ先生に振りやがつた。

「君も良く出来た頭だな～。 そんなんで良くいこひに来られたな？」

先生ビックリだよ、わっけみみっけっけ。」

悪の親王のよつた先生の声…。

先生にまで笑われた…。

「ちよつといれは詰あつで・・・。」

「そんなもん無いでしょ？ 私ずつと見てたんだからね。」

「むつ・・・。」

もう俺は観念した。言えまば言ひぬまじ傷つく・・・。そう思った。

「それよりも、もう1時50分だぞ？ 行かなくていいのか？」

「はつ！ さうだつた！ 翔ちゃんがぐずぐずしてゐかうや。」

いやいや、アンタ等のせいだつて。

「んじゃあ、先生私たち行くね！」

「ああ、行つてらっしゃい。」

先生は、何かをやり遂げたよつた気分のよつだつた。

「あ、そうだつた！ 先生何ていつ名前ですかあ～？」

「ん？ 先生？ どっこいなんだ？」

先生は、キヨロキヨロと辺りを見回した。

「こや、アンタの「」とだつてば・・・。」

俺は、マジで呆れた。 いろんなヤツが果たして先生でいいのか・・・。  
と。

「あ～僕？ 僕はね、「「退屈笑魔」」(たいくつ・しょうま)っていう名前なんだ。みんなからは退屈先生って呼ばれてるんだけどね。良かつたら君達もそう呼んで。」

嘘ではないみたいだ。

「退屈先生～？ 名前からしても、性格からしてもそんな感じですね～。非常にユニークで面白いですね。」

「ああ、みんなからもそういう言われる。」

「ヤツですね。 では、先生私達もつそろそろ行きますね。 それじゃあー。」

愛美は俺を引っ張つて走り出した。

この時、俺はちゅつぴり愛美の「」とを意識してしまった。

「では、改めて行つてらつしゃい。」

先生も先生で「」とを二つ「」としながら手を振つている。

。



PHASE - 02

期待と不安（後書き）

次回も宜しくです

## PHASE - 03 入学式

「ほら、早くー！」

「待つてって。そんなに早く走れないって。」

入学式まであと、2分近くになつていた。

「しかし、ここは学園こんなに広いんだね。」

校舎と校舎の間に噴水広場や、花見専用スポット、学園際に使用すると思われる屋台通りや、体育館にあるようなステージも見られる。

グラウンドには、テニスコート9面、野球球場、サッカー・ラグビーなどの大きなグラウンドが見られる。本当にすごい広さだ。

小・中と体育館が大きく見えていたのに、この学園となるととても小さく見えてしまうくらいだ。

「あ！ 翔ちゃんー！ あつたあつた！ ここはここーー！」

愛美の手が俺の手をさらに圧縮させた。

「早く中に行こーー！ 入学早々遅刻はマズイからね。」

「分かってるわよー！ ほら、もうひとつ走りよ。翔ちゃんしつかりね。」

そう言いながら俺達は体育館の中に入つていった。

「20XX年度入学式を始めます。」

一人の教頭先生らしき先生の声がする。

俺達は開始1・3秒前に着いて何とか間に合つたみたいだつた。

入学式では、体育館の中で生徒が椅子に座つてゐる状態となつてゐる。

並び順は、名前の早い中学校から順番になつていて、その出席順になつてゐる。

だから、今俺の隣には愛美がいる。華恋と岸田といふ名字で。

「ねえ、翔ちゃん結構生徒数多いね。」

それもそうだ。この学園への定員数は500人もいるからだ。1・2・3年と約1500名となるのだ。

「これより新入生代表から先輩方々への挨拶文を述べて頂きます。

・・・新入生代表、春風美鈴ステージへ。」

みんなが一斉にステージの方へと目をやつた。

階段をミニミニシと音を立てながらステージのある教壇の所に立つた。とても落ち着いている表情だ。

「はは～ん・・・。 あの人があ例の春風さんね。」

「愛美知つてるの?」

「知つてるも何も、あの人前にモデルからのスカウトがあつたんだつて。」

「それで?」

「それでね、彼女悩みに悩んだ末、まず高校生活を充分に満喫してみたいって言つて断つちゃつたのよ・・・。 勿体無い話よね。」

確かにそのような感じだ。

今現時点を見る限り、容姿は言つまでもない。髪の長さはサラサラとした感触のようなストレートロングを纖細に帯びていて、ひらひらと舞うと彼女の心のピュアな気持ちそのものが伝わってくるように見える。

スタイルも言つまでもなく抜群。足はスラリとしていて胸の辺りの大きな膨らみが、男の心をモノにするような感じにもさせれる。

「成績優秀で美人。 おまけにスタイル・運動神経抜群。 この学園のアイドル的存在なのよ?」

「へ～・・・。」

俺は前に居る彼女の顔をずっと見つめていた。

「翔ちゃんその眼差しは何なのかな～？」

「え・・・？ それはその・・・。『わゆる拝見みたいな感じです。』」

俺は不意打ちを食らつたような感じをした。

俺のタイプ上、申し分のない相手という「ト」に気がついたからだ。

「ふ～ん・・・。翔ちゃんあ～いう人が好みなんだ・・・。まあ、分からぬい「ト」もないけどね。さすがはアイドルね。」

愛美の表情が一瞬笑みからず～～と遠ざかるような表情を浮かべた。・・が、また通常通りの顔に戻つた。

「まあ、タイプといつと好きといつのとは違いますから。」

俺もちよつと空気を読んで愛美を気遣つた。

「でも、翔ちゃんが誰とじつじよつが私には関係のないことだしね。

顔は笑つていても見えたが、満面の笑みではない。いつもの二ツ「リ顔でもない。内心に何かを想つていてるような・・そんな感じだ。

」

そういうと話をしている時に、新入生代表が話しをし始めた。

「暖かい日差しが私たちの心の冷たさも暖かくしてくれます。冬の厳しかつた寒さを押しのけるように・・・。そう、それが先輩達の

コトでもあります。私たちは、この学園に期待と不安な気持ちを抱えたまま今ここにいます。その不安な気持ちを追い払ってくれる方々・・・先輩達と先生方です。ですから、私たちをどうか導いて下さい。正しいと想う本来あるべきの場所に・・・。この先どんなコトが待ち受けているのかは分かりません。でも私たちはそれをどんな苦難があつても良いモノへと変えていきたいと想います。それを行う見守つていて下さい・・・以上です。」

。拍手が体育館の中で鳴り響く。

癒し系の声とそれと照り合わせるような台詞がとても合っていて、心ときめいている人が見られる。

汚れていなく純粋な声。まるで女神様のせわやさしきよしひな・・・そん  
な感じだ。

「いい声の持ち主だつたね。私女だけど、少し感動しちやつた。」

「うん。俺もすげ感動した。ホントに娘に娘だつたな。」

俺も心の底からこう思った。さすがはアイドルだ。

「良い挨拶文でしたね。」  
それでは次に学園長先生の話です。」

教頭がコホンと咳をして場を促した。

「えゝ・・・本校は・・・・・。」

と他愛のないお喋りが聞こえてくる。

まるでやつきの良い雰囲気だったモノを打ち消すような、オヤジ声。

みんなしてもう、聞く気ないみたいな表情をしている。

「・・・では、以上です。」

やつと学園長の演説が終わった。

「以上を持ちまして、20XX年度入学式を終わります。」

みんなの張り詰めていた思いが外に放出され、ため息や、「やつと終わつた」という様な達成感の笑みを浮かべている。

「はあ～～、やつと終わつたあ～～。」

愛美もそのうちの一人だった。身体全身をあちらこちらに伸ばして軽い笑みをこぼしている。

「それでは、新入生のみなさんは、この後すぐにじ自分クラスに入つて明日以降の予定を言います。 ですので、前にあるクラス発表の紙を貼りますので見に来てください。では、解散して下さい。」

解散と合図と共に今まで「無」のような雰囲気が一瞬にして、ワードカップ並みの盛り上げを見せている。

同じ仲間と外れて残念がっている人や、同じクラスになつてテンションが上がっている人などさまざま人たちが見られる。

「私達も見に行こつか。」

だんだん人が少なくなった頃に俺達は紙の貼つてある所まで行った。

「えへと、岸田、岸田・・・。」

「えへと、華恋、華恋・・・。」

俺達はお互に自分の名前を探した。

「あ！ あつたあつた。」

先に見つけたのは、ヤハリ愛美だった。

「あ、ホントだ！」

俺も愛美の後を続くかのように見つけ出す「ト」が出来た。

「・・・また同じになっちゃったね。」

「・・・うん。」

「改めてこれからもヨロシクね

「おひ。 イヤヤヤヤ宣しく～。」

これは何かの運命なのか？ ヤハリ、ヨイツと絡むことが多い、何かにつけて同じになることが多い。

でも悪い気はしない。むしろ嬉しい。

「あ・・・・・」

俺は、改めてクラス発表の方へと皿にやつた。

するといそこには、「春風美鈴」と書かれた文字があった。

俺は、この時運命といつモノを初めて考えた。

愛美はまだこの「トトには気が付いてない。

これからどうなるのか?」の先には一体何が・・・?

「せひ、翔ちゃん行くよー。早くしないとまた遅刻寸前になっちゃうよー。」

でも、この惱み的存在のモノを愛美の笑顔によつて消え去つた。非常にスッキリした気分になつた。

「んじゃあ、行こつか。」

「じゃあ、教室まで競争ね 贠けた人はジュースのおいりつといふことで」

「あ・・おー・・・・。待てってー!」

俺達は、誰もいない体育館を後にして教室に走りだした

。



PHASE - 03 入学式（後書き）

なるべく早く更新するつもりですので、宜しくです。

「ま、愛美ちゃんと待てよ～～！」

「待てって言われて待つ人がどこにいるのかな～～？」

俺達は、無我夢中で走っていた。

けど、あつとこう間に自分達の教室に着いた。

「翔ちゃんの負け～～。ジースおごりつね～！」

「はあはあ・・・分かったよ・・・。」

愛美も愛美であんなに走ったはずなのに、吐息すら見せなかつた。

それと比べて俺は、もうバテバテだ。やはり、半年運動をしていないせいかこうなつちゃつたりしている。

「翔ちゃん、もう息上がりてるね～。私なんてまだ余裕よ～」

「何でなんだろうな、この差は。

ガラガラ 。ドアの開ける音がする。

「はい、それでは～ みんな席に着け～。」

一人の学年主任っぽい白髪の髪の先生が教室に入つて來た。

この時俺と愛美は教室の中で少しお喋りしていた。

そして、俺達以外の人達も仲のよい友達同士でお話をしていた。

その先生の名図ちと共に教室の中は静まりかえつて、椅子を滑らす音だけが鳴り響いていた。

俺の席は窓際の一一番後ろの方だ。それで、その前の席には・・・、

「翔ちゃん、あの先生何歳だと思つ?」

やはり、コイツだ。

何かの因縁があるみたいか、くつづくのがやけに多い。

「そんなもん知るかー!」

「こらそこー、静かにしなさいー!」

愛美の質問は小声だつたのに、俺の返答は少し大きな声だつた。

「もつ、翔ちゃん。声が大きいつてば。」

「いや、すまん・・・。」

何で俺が? と思つくりこの悲しさだ。

「それでは、このクラスの担任を紹介する。」

その言葉と共に一人のメガネ教師が現われた。

「なぜ・・・・？」

「あー、あの面白い先生だ。」

そつ田の前に現われたのは、

「どうも、退屈笑魔です。 1年間宜しく。」

あのD.S先生だ。

と、俺達の声に気付いたのか、こちらにそつ田を向けた。

「ああ。君達は・・・・。何か面白い出会いだね。 1年間宜しく。」

とまあ、のん気そうな声をしている。

「は・・・はい。」

「はい、宜しくお願ひしますー。」

と、俺達のそれぞれの対の気持ちが溢れていた。

「ああ、そうだった。春風さん、僕のお手伝いありがと。まあ、お、  
席についていいよ。」

「はい、分かりました。」

ドアの前に立っていた少女、春風美鈴が出てきた。

そして、徐々に俺達の近くに来て、俺の隣に座った。この時初めて気がついた。俺の隣の席が空いていたことを。

「春風美鈴です。宜しくね。」

彼女はこちらを向いてお上品やつに軽いお辞儀をして、ニコやかに笑った。

「よ、宜しく。」

俺も軽いお辞儀返しをした。

「では、明日以降のコトだが・・・。」

とまあ、あのＤＳ先生の雑談が聞こえる。

俺はこの時、一人の美女が目の前にいる状態を知つて、内心テンションが上がっていた。

「それでは、また明日。元氣でーーー。」

先生はそう言い残してスタスターと教室を後にした。と、それと同時にクラスのほとんどの男子が春風美鈴の所へやつて来て、

「春風さんーーーこれどーーー。」

「あ、僕のもどーーー。」

と、メルアド入りのラブレターを渡した。

本人も少し困り顔で、

「あ、ありがとう・・・。」

と、苦笑いをしていた。

男子も男子で、自分の想いを伝えたせいか、達成感の顔に満ち溢れてその場を去った。

俺は、その光景を啞然として見ていた。愛美も同じ様に。

でも、恐るべし学園のアイドル・・・。ここまでの人気があるとは・・・、いや、このような光景を目にしたのは初めてだ。

そう、クラスの男子の心を自分のモノにしたような感じだったのだ。

「大変ですね・・・。全部読むんですね？」

俺は、彼女の机の上にある大量のラブレターを手をぱちりして見ながら言った。

「中学校の時もこんな感じでしたから、もう慣れちゃってますけどね。一応目は通しますけど、後はどうなるか・・・。」

彼女は、アドレスの書いてある紙を見て、深いため息をした。

「分かります・・・。その気持ち。私の場合口でしたから、相手の顔

を見て返答するのが辛かったですからね・・・。」

愛美も愛美で、山積みになつてゐるラブレターを見つめていた。

「そうですか・・・。そちらも大変でしたんですね・・・。」

彼女もまた、山積みになつてゐるラブレターを見つめて言った。

この俺には分からぬ世界。 モテルという現実。

他の人から見れば羨ましいと思うのが当たり前かもしれない。

けど、それは見かけだけの問題で、本人はそうではない。

俺は初めて、この現実を思い知らされた。 モテル人が大変だとうことを・・・。

「そう言えばお名前を伺つておりませんね・・・。失礼ですけど、お名前は・・・？」

「俺は、岸田翔平つて言います。」

「私は、華恋愛美つて言います。」

「そうですか・・・。あなた方お一人は恋人どうしなんですか?」

「いえいえ、恋人ではないです！ 単なる幼馴染です。」

俺は、何故か完全否定するかのように強く否定してしまった。

「そ、そこまで否定しなくても……。」

愛美は何故か、俺の方をギロリと睨んでいる。

「そうですか……。でも、恋人同士に見えますよ？ 他人から見ればだけね。」

「他人から見ればだけです！」

俺はこの時むづちやくぢや動搖していく、心にも無いことを言つてしまつた。

「だから、そんなに否定しなくても……。」

愛美は悲しそうにこいつを見つめている。

「確か岸田翔平君でしたよね？」

彼女は念を押し入れるかのように質問してきた。

「はい、そうですけど……。」

「分かりました。それでは、お先に失礼しますね。では、また……。」

彼女はそう言いながら机の上の大量のラブレターをカバンの中に入れ、立ち上がりてこちらを向いて一ヶ口リ顔でお辞儀をして教室を

去つていつた。

「何で最後名前を質問したんだろう・・・。」

俺は、サッパリ分からなかつた。

「何か意味があるんでしょうにね・・・。」

愛美もこのコトに疑問を抱いていたようだつた。

気がついたら教室の中には俺達一人だけが取り残された状態となつていた。

「もう、誰もいなくなつちゃつたね。帰ろつか。」

「うん、そうしようか。」

俺達は、机の横にぶら下げていたカバンを取り出して、教室を後にした。

PHASE - 04 春風美鈴（後書き）

ネタが底をつきたつにならないので、どんどん書いていきたいと思いま  
す。

## PHASE - 05 久々の一人

「明日の朝、メンケジ先に行つてて。」

昨日の帰りに聞いた言葉が歩きながら思い出す。

今日の登校は珍しく一人だ。

小・中学校の頃から一緒に登校していたこともあって、少し寂しく感じる。

でも、過去に何回か「いつ時もあったので、大して気にしなかつた。

今日も通学路に桜の絨毯が見られる。

校門の前に来た時、何か落し物をしたかのよつに何か探し物をしている人がいる。

「あ、おはよ、岸田君。」

その人物は春風美鈴だった。

「お、おはよ。ここで何してるの？」

手を地面のあちこちに当てている彼女に問いかけた。

「ううつと、『ンタクト落としがやつてね。探してるの。』

周りには、もつすぐチャイムが鳴るせいか一人もいない。

「よし！俺も探すわ！」

田の前に可愛い美女を放つておくことは出来なこと思い、彼女と一緒に探してあげることにした。

「でも・・・、もつすぐチャイム鳴っちゃうよ・・・？」

「いや、いいよ。困っている人を田の前に放つておくなんて出来ないからね。」

「あ、ありがとう・・・。」

彼女はしばらく俺の方を見つめていたが、お礼の言葉を言つて終わると共に探す仕事を再開し始めた。

「ビーラくんに落としたか覚えてる？』

俺は辺りをキョロキョロした。

「え~と、あんまりビーラくん・・・。』

と、言い終えた時俺は、桜の花弁の下に何かがありそうなヤツを見つけた。

それをめぐると、

「もしかして、これのこと?」

「あ、そりそれです! 良かつた。どうもありがとうございました。」

彼女はほつと胸を撫で下ろして、一口ヤカにお辞儀した。

「どういたしまして。まだチャイムが鳴るまでに時間があるよ。」

「あ、本当ですね。こんなに早く見つかると思つてなかつたもんでも…。」

「…。どうもしあうか。」

やつて俺達は教室へ走り出した。

「えへ…。」で、ドモルガンの法則を…。

先生の眠たそうな声が聞こえてくる。

何とか俺達は間に合つたみたいだ。良かつた。

でも、愛美の姿が見えない。今日は欠席なのかな?

「今日は、愛美さんの姿が見えませんね…。」

「たぶん、家の都合があるんだよ。」

俺は、説得力に欠けている返答をした。

「あれ・・・？」

突然、春風が机の中を探りながら言い出した。

「どうしたの？」

「また、無くなっちゃつた・・・。」

「何が？」

「シャーペン・・・。いつもこいつなんです。中学校の時も・・・。」

何となく想像はつく。

彼女のコトに惹かれている人なら彼女の使つてている物を使いたいと  
いう欲を持っている人もいるかもしれない。

でも、そこでシャーペンを？ という疑問が生まれてくるが、まあ  
気にしないでおこう。

「じゃあ、俺のを貸してあげようか？」

「で、でも、それ1本しかないのでは・・・？」

「うん、いいよいよ。後で友人に見せてもらえばいいしね。それ  
より春風さんは、俺より頭むづちやくちやいいから・・・ね！」

「で、でも・・・。」

「いってー心配しないで。」

俺はこの時自分のコトなど、どうでもこいと penséた。

俺みたいに勉強に意欲がないヤツより、頭良いヤツに譲った方が効率がいい・・・と思つたからだ。

「あ、ありがとう・・・岸田君優しいんだね。」

彼女は俺のシャーペンを、優しそうな白い手で受け取つた。

「いえいえ。でも、優しい人は俺以外にも沢山いるけどね。」

俺は、ちょっと照れくさくなりながら言つた。

「ううん、そういう優しさじゃない。何ていうか・・・、その・・・、うまく言えないけど・・・。」

彼女は言葉に詰まりながらも、俺には何が言いたいか少しだけ分かつた。

それを聞いた時、むっちゃくちゃ嬉しかつた。そう、あの愛美にすら言われたコトなく、初めて女の子に言われた言葉だつたから。

キーンピーンカーンピーン。

「・・・もつチャイムが鳴りましたか。では、終わります。」

と、教師は持っていたチョークを置いて、そう言い残して教室を出て行つた。

俺も昼食の準備をし、食べようとした時、

「ねえ岸田君、お昼一緒に食べない? その・・・色々とお話をしたいし・・・。」

学園のアイドルからのお誘いだ。

でも、何で俺? と思いつらり・・・。

こんなトコ他の男子に見られたら殺される・・・と一瞬脳をよぎつた。

でも、せっかく誘ってくれてるし、俺も春風のコトをこなぱこ聞きたいと思つて、

「うへん・・・、別にいいよ。」

とあつせつのべじてしまつた。

「じゃあ、5分後屋上に来てね。待ってるから。」

彼女はそう言い残し、その場を去つた。



## PHASE - 05 久々の一人（後書き）

ちょっと先を急ぎすぎて、意味が分からんと思つた方は自分の末  
熟さを許して下さい。

俺は自分の昼食を持ったまま屋上へと向かった。

「岸田君遅いよ・・・。」

春風は顔を膨らませながら少し怒っていた。

「ゴメン・・・、ちょっと購買に買出しに行って遅くなっちゃつたわあ~。」

学園といつ学校になつてから、便利なコトで購買といつ昼食が買える所がある。

でも、便利なせいか人がいっぱいいて、自分の田舎での物を買うのに時間がかかる。そこんところが凶かな。

「それならしようがないね。」

「じゃあ、食べよっか。」

俺はそつひとつで、さつき購買で買ったおにぎりをむさぼった。

彼女も彼女で、自分で作った弁当を取り出しても上品に食べている。

「私ね、実は昔から男の子といつのが苦手なんだよね・・・。」

「何で？」

俺は、疑問に思つた。俺も一応男なんだけど……と。

「小学校までは、まだ私恋愛対象として見られなかつたの。だから普通に男の子とも喋るコトが出来たの。小学生だからまだ、そういう感情が無かつたのかなつて。でも、中学生になつたとたん急に私のコトを意識して、小学校の頃に普通に喋つていた男の子までもが意識し始めちやつて……。そうなつちやつてから、ラブレターとか、告白とかの毎日で……。そのせいで私男の子を好きになることが出来なかつた……。自分の好みの男の子を探す余裕がなくて……。」

彼女は、胸の奥そこに今まで溜まつていた想いを俺に打ち明けてきた。

「私もう、それが嫌で嫌で学校に行くのも嫌になつたんです。でも、それを助けてくれたのが友人達だつたんです。ホントに嬉しかつた。私にあんまり近づかないであげてつて……言つてくれたんです。

そのおかげで前よりかは人数が減つて、少しほ楽になつたんですけどね……。」

彼女はさらに話し続けた。

「それで、何とか卒業まで我慢出来たんです。それで高校生になつて、この学園に来られた……。そして、初めて岸田君に会つた。岸田君に初めて会つて、私何だか懐かしい感じをしたんです。小学生の頃楽しく喋つていた男の子にそつくりで……。理由はですね、私が隣の席になつても他の男の子みたいに好き好きオーラを出さず、同性同士みたいな話し方で接してくれたことです。それが私にとつ

て嬉しかったんです。それが夢でもあつたんです。男の子と普通にお話しが出来て、普通に行動するということ……。」

「そういう口調だったのか。俺の今までの疑問を打ち扱つかのような証言だった。

だから、俺に話しかけてきたり、昼食を誘いに来たんだ……と。

「それから、徐々に恋愛感情へと発展していくつていうことってあるじゃないですか。私、そういうのにすごく憧れていって……。簡単に言つたら、今まで私が出会つた男の子の中で初めて出会つたタイプなんです。だから、つい興味を持つてしまつたんです……。岸田君に……。」

俺は、納得納得の感情でうんうんと頷いた。

「だから、お友達になつて下さー。」んな私ですけど……。」

付き合つて下せこと言われたら、考え方だつたが、お友達になつて下せこと言わわれれば、

「うそ、そのつもりだよ。」

と当然にOKしてしまつ。

でも、お友達になる時は自然になつていいくモノだと思つていたが、「なつて下せー」と言われてなるのは少し違う気がしてならない。

「あ、ありがとうございます。」

「いやいや、おれはこりなこよ。当たり前の口トだからね。」

俺は、彼女が恥ずかしそうな表情をしていたのでそれを浄化させるよつた満面の笑みで答えた。

もつ、すでに俺達は自分の食べべき物を食い終えた状態になつてゐる。

「もつ、俺達友達同士になつたんだからさあ、まだ何か言いたいことがあるなら言つちやつていいよ。」

俺は、彼女がまだ何か言いたい気な表情を曰いた。

「では、お言葉に甘えて・・・。岸田君は好きな人いるんですか?」

「え? 何でまた急に?」

急なる予想外の質問で俺はびっくりした。

「気になつたものですから・・・。」

春風は俺の顔をじつと見つめつゝる。

「うへん・・・。良くわかんないな・・・。 気付いたら好きになつちやつてる状態つていう感じだからね。」

俺は、彼女から皿をそらしながら答えた。

「じゃあ、今現時点ではいるんですか?」

またまた見つめてくる。緊張の張り詰めた表情だ。

「・・・今はいないよ。これから出来るかもしないけどね。」

過去、女の子とこう者を好きになつたことはあるが、でも今現時点での状態では、そういう感情は無い。

「やうなんですか~。」

彼女は嬉しそうに二三回している。

「やうこいつ毒風さんばどひなの?」

「美鈴つて呼んでください。もう友達同士なんですから・・・。

れつかの「ハーハーハ」笑顔とは程遠くのモノ悲しそうな表情を見せた。

「じゃあ、美鈴さんばどひなの?」

「美鈴・・・。」

「美鈴はまどひなの?」

「私は・・・。」

なぜか、ゴクリと唾を飲んでしまひ。

「ひ・み・つです。」

「あ~するこぞ~、美鈴だけ言わないなんて。」

「だつて、言つたやつたの面白くないじゃないですか～。」

美鈴は、クスッと笑いながら俺にワインクした。

か、可愛い・・・。俺は内心温かみを覚えた。

もしかしたら、恋に落ちてしまつような・・・そのなよつな感情に一瞬よぎつたからだ。

キーン／ーン／カーン／ーン。歯休みの終わりを告げる音が聞こえる。

「早いですね・・・。もう少しお話をしたかったのに・・・。」

美鈴は残念そうに首を下に向けている。

確かに今まで良いイメージだつた空氣がチャイムの音と共に妨げられたのだ。

「でも、隣同士なんだから～、いつでも話なんて出来るじやん。」

「愛美さんがいる場合でも、そんなコト出来ますか？」

愛美がいる場合ー？ 確かに言われてみればそうだ。

今日は愛美がいないおかげで、ここまでアイドルと仲良くなれたん

だ。

もし、いつもどおりに愛美がいたら、俺は愛美を気遣つて愛美の方へ行つたかもしない。

でも今は違う。俺は今一人なんだ。

「それは・・・」

俺はそんなコトを考へていたせいか、言葉に詰まつた。

「なら、岸田君のメールアド聞いてもいいですか？ いつでもお話ししたいと想つているんで・・・。」

お、俺のメールアドー？

愛美ですらに教えていないメールアド。

しかも、女子とメールしたことがないこの俺が、女子とメール出来るなんて・・・。

実は、昔からそれは俺の夢の一つでもあった。

女子とメールすることって、何か温かみを帯びていて良い気分になりそうな予感がする。

しかも、それが学園のアイドルとなると尚更だ。

「美鈴は、俺以外に男子とメールしたことは・・・？」

「あつせんよ。」

あつせり言ひ放つた。

「じゃあ、あのラブレターのアドレスは……？」

「あれば、送らすのままにして保管してあります。」

とまあ、あのラブレターに入っていたアドレスには田を向けなかつたといつ真実が今こゝに証明されたのである。

「やつぱり、興味がある人とメールをしてみたいつていつのは誰もが想つコトですからね。」

あのラブレターに入つていたメルアドは興味がないと書いつのか？

「聞いてもいいですか？」

美鈴は両手を重ね合わせ、こつちの出方を伺つてゐる。

「う、うん。いいよ。」

「う、うん。いいよ。」

俺は素直に返事することしか出来なかつた。

そう言つて俺はポケットにある携帯を取り出して、自分のアドレスが載つてゐる所まで探つた。

美鈴も美鈴で、ポケットから携帯を取り出した。

「ひつて俺達は無事アドレス交換を成し遂げた。

こんな可愛い子と交換出来るなんて夢みたいだ……って思いながら。

「岸田君とアドレス交換出来た……何か夢みたい。」

それは一回じだ。なんせ学園のアイドルと交換出来たからだ。でも、俺はちょっと調子に乗ってしまいそうな気がした。その気持ちを抑えようと必死だった。

「わあ、もう授業が始まっちゃうね。行ひつ、翔平君」

初めて下の名前で呼ばれた。

関係が深まるにつれ、どんどん何かが変化していく現実を見て俺はビックリした。

「うそ、行ひつか。」

でも、その表情を内心だけに留めておいた。

俺達は、青春の香りが残る屋上を後にして教室へ向かった。



次も宜しくです

「んで、本命はどうちなんだよ?」

「な、な・・・別にそんな感じや・・・。」

コイツは俺の小学生の頃からの親友、嵐勇太あらし・ゆうただ。

身長は172cmと俺より高い。

しかも足が長く、容姿はイケメン級だ。

そんなせいか、中学校の頃は5人くらいと付き合ったコトがあるらしい。そつ、まさにプレイボーイ級のヤツなんだ。

過去俺の恋愛相談にのってくれたコトもあって、どんなコトでも話せる唯一の相手と言つていい。でも、少なくとも向こうもそう想つてくれてるようだ。

だから、俺はコイツと絡むコトが多い。あと、一人で遊んだりとまあ、じく普通の友達関係を築いている。

たまに、愛美とも一緒に行動して3人と食事をしたり、遊ぶコトもある。

今、愛美は愛美で新しい友達が出来たみたいかそつちの方へ行つてゐる。まあ、あんなに社交的なヤツやからすぐに友達くらいなら出来るだらうけど・・・。

それを見計らつたかのよつて」コイツは俺の所へ足を踏み入れてきて、ささやいてきたのだ。

「最近、愛美との行動も多くなるわ、お次は学園の可愛い子たちやんとメールアドを交換するわ、そこまでやつといて意識しないはずなんてないのでは?」

勇太は薄気味悪い笑みを浮かべながら、皮肉った言い方をしてきた。

「それはまあ・・・何ていうか・・・。」

俺は完全に言葉に詰まった。

そりやあやつだ。この現実くらい自分でも分かってる。

でも、それをどう受け止めたらいの分からぬのだ。今まで、愛美以外の女子とは喋ったコトはないし、愛美との行動もあそこまでは多くなつたこともない。そり、この何かの変化に俺は分かっているのだ。

「俺様だつたら、もうどちらかにアタックしてんだけどな~...。困つたオクテさんだ・・・コイツは。」

勇太の顔は呆れ顔へと変わつていつた。

「だつてしょうがないじゃね~か。こんな体験初めてだし、どう受け止めたら...。」

「素直じやないってコトだな。それは。」

勇太はチチチと舌打ちしながら指を左右に動かした。

「でもまあ、何か変化あつたら俺様に何でも言つてくれよ？　この状況なかなか目を見張るモノがあるしさ～」

「どういつ意味だよ、それ…。」

「そ～いう意味だ。じゃあな、オクテ君」

勇太は自分の言いたいコトだけを言つてその場を去つた。

「オクテつて…。お前がプレイボーイなだけだろうが…。」

俺もそ～い残して、その場を後にした。

「いい天気だね～、こんな口はのほほんとしたい気分だね。」

「俺は♪口♪口♪したいな。」

「同じ♪ア♪でしうが。」

久々の愛美との下校だ。何だか懐かしく感じる。

帰り道には入学式桜の絨毯が見られた所が、あつという間に葉の絨毯へと変わっている。

「あのや～・・・翔ちゃん・・・。」

突然、愛美の思いつめた表情を浮かべ始めた。

「何だよ…。」

俺はちよつぴり緊張した面持ちだ。

「最近、何か春風さんと仲良いみたいだからさ～・・・。」

出た～～ いづ質問。

わっさ、一応友達の勇太にも言われた口トだ。

「わっ？ 俺は普通に接しているつもりだけど。」

ちよつと嘘染みた答えになつてしまつた。

「でも、春風さんは翔ちゃんに『氣があるんじや・・・？』

「つ～ん・・・、どうかな。」

確かにそつかもしれない。けど、今はそつ断言仕切れない。

だからか、また俺は言葉に詰つた。

そう言い終えた時、長い沈黙がした。歩く音だけが喋り声のよつこ  
聞こえて仕方なかつた。

「じゃあまた明日学校でね！バイバイ～。」

さつきの表情とは逆に、愛美はいつもの表情に戻っている。

「うん、じゃあまた明日。」

俺も今までの重い雰囲気を断ち切るかのような笑顔で呟つた。

「今日は疲れたな‥。」

今日は、親友と愛美にも同じコトを聞かれて精神を破壊されるかの  
よつな気持ちになつたのだ。

そりやあ、疲れて仕方がない。

俺はそう思ひながら、自分の帰るべき場所へと足を踏み入れた  
。

俺は今天井を見上げている。

「はあ、ホントに疲れた‥‥。」

こんな言葉を言つても疲れはとれないこと、ことを知つてながらも、  
つい声がでてしまう。

そう言いながらだんだん、まぶたが閉じていった時

、

「ブーン、ブーン、ブーン。」

突然鳴り出した、携帯のバイブ音。

せっかく転寝してきた時にこれだ。

今はもう非常に眠い。このまま放つておいて寝たいと思っている。

でも、何故だか手が勝手に受信BOXへと探し始める。

で、目も勝手にそれを追つてしまつ。

“こんな時間に、ゴメンネ翔平君。明日暇かな？”

これは・・・お誘いのメールだろうか。でも、「暇?」と聞かれているのでそようだろう。

明日は土曜日といつも休日だ。

俺の場合、家でTVを見るか、ゲームをするか、パソコンをいじるか・・・といつもコトしかやることはない。

あえて言つなら、いつも暇人だ。

美鈴とはあれ以来友達関係になつたといつもの、彼女は積極的にアプローチを仕掛けてくる。

でも、悪い気はしない。

そんなにシツコクないし、空氣だつて読んでくれる。

そんな部分に惹かれるモノだつてある。

そんなコトを考えながらヤハリ答えは、

“一応暇だよ。”

とまあ、当たり前の答えを出した。

続いて美鈴は容赦なくメールを送つてきた。

“じゃあ、明日10時に学園の校門前に来てね。待つてるかい。”

結構甘い感じを覚えた。

前にあれから何度か美鈴とはメールしたものの、学校のコトとか、自分の紹介くらいしか話してない。

でも今田は違う。列記としたお誘いメール。

「友達……だよな……。」

俺は自分の心にそう言い聞かせたように呟いた。

みんながみんなして、あんなこと言つかり……。ビリしても意識してしまいがちだ。

“分かった。”

“それじゃあ、お休み”

”

“うん、おやすみ”

俺は、ヤハリ眠いこともあつたのでメール上口数が少なかつた。

そう思つていると、もう、やる事を済ましたせいか、まぶたが自然に閉じていった。

## PHASE-07 お説明（後書き）

昨日多く更新してしまったせいか、今日は1種しか更新出来ませんでした。

「「」、「」めん！ 待つた・・・かな？」

時刻は10時30分を回っている。

確かに集合時間は10時だったような…。

「うん、 いっぽい待つた。」

過去に1回待たせたコトもあって、 美鈴は結構怒つてそんな表情だ。

「ホントに「」めんな。 お詫びと言つちやあなんだが、 その・・・  
、 何かおごったるからさ。」

俺は頭をポリポリかきながら述べた。

「しようがないですね。 翔平君がそこまで言つなら許してあげます。 でも、 約束はちゃんと覚えておいて下さいね。」

美鈴はだんだんいつも通りの表情へと戻つていった。

敬語の時の口調と、 敬語じゃない口調の違いを聞いてみると、 何か別人が話しているような気がしてならない。

この使い分けは何だるつ…。

今日は休日のせいか、 学園の周りに人が見当たらない。

その学園の姿を見ると、いつもと違う姿を象っているような気がしてならない。

「さて、これからどこに行きましょうか…。」

まだ決めてなかつたんかい！ つて突つ込みたい気持ちでいつぱいだつた。

でも、これはしようがないと思った。

何て言つたつて、美鈴も俺みたいな男性と一人つきりでどつかに行くところは初めてだ。

女の子となら行く場所は簡単に決まるのだが、異性となるとそりはいかないようだ。 美鈴の場合…。

そつ思つていた俺だつたが、美鈴はやつと答えが辿り着いたようだ。

「では、最近駅前に出来た、『ムーンライトデパート』っていう所はどうですか？」

「ああ、確かに最近出来たみたいだもんね。でも、そこは…。」

そつ、そこはカップル専用スポットの場所もある所なのだ。

前に勇太が言つていたのだが、

『あそこは凄いぞ…。俺も行ったコトはあるんだが、もうほつとんどがカップルの溜まり場でさー、ラブラブムードに発展しまくつ

てるんだよな～。だからわ～、自分達もそつしなくちやイケナイ  
みたいな感じにさせてくれるんだよな～。簡単に言えば、人を簡単に  
その気にさせられるコトが可能な所なんだ。この俺でも、結構危な  
かつたしな～』

コイツの言つ『危ない』は何だろうと思いつつも、まさかこの俺が  
その場所に縁があるなんて夢にまで思つていなかつたコトだ。

それを軽々しく言つ美鈴も美鈴なんだが…。

果たして美鈴はこの「ト」を知つてゐるんだらうか？

「あそ」…・何？』

「あそ」はさて、何かほとんどがカッブル専用スポットらしいん  
だよね～…。』

「うそ、知つてゐよ。』

し、知つてゐ！？

知つてて、良く軽々しく俺に言えたもんだと思つ。

「翔ちゃんが嫌つて言つたなら無理にとは言わぬいけど…。』

「べ、別に嫌とかそんなんじゃないけど…。何かこの…俺でいい  
のかな～って思つちやつてわ～…。』

「ダメだったら、ここに呼んでませんよ？』

「確かに……。」

確かにそうだ。

もし、俺と行きたく無かつたら何もこじに呼ぶ必要なんてないからな。

「分かった、じゃあ今に行こう。」

とあっれつ〇〇にしてしまった。

内心少し複雑な面持すだ。

「では、行きましょうか」

俺達はそつ言い残して、例の場所へと歩んでいった

。

俺達は、学園から少し歩いた所のバス停から駅まで行つて、5分の歩きでここまで来れたのである。

「やつと着いたね。」

「ちよつと疲れちゃいました。」

「じゃあ、ちよつと早いけど毎日飯食べよつか。」

こんな少しの短旅でも、美鈴は疲れの表情を見せた。

「デパートの中には、数多くの時間を過ごせる場所があるはずだ。

俺達はその内の一つに行こうとしている。

「はい、そうですね。」

「美鈴は何か食べたいモノもある?」

「えへと…、パスタ系が食べたいですね。」

「じゃあ、それにしようか。」

美鈴の案により、俺達はパスタが食える所まで移動した。

。

「えへと、私は、明太子スパゲッティ。」

「じゃあ、俺はパスタをトマト。」

「えへと、明太子パスタですね? 少々お待ち下さい。」

店員さんはそう言いつぶつと終えると、注文表を持っていった。

美鈴の顔を見ると、いつもの顔を見ながらニヤニヤ笑っている。

「どうしたの? そんなにニヤニヤしちゃって。」

「だって、何か嬉しいだもん。 翔平君とこんな場所に来れて、一緒に食事をしてていいっていうコトがです。」

過去愛美とは、一人つきりでこんなことをしている時もあったが、そつ多くはなかった。

少なくともその時は、完全に男と女という関係を意識はしていなかつたが…。

でも、今田は美鈴の一言一言が、その異性の意識をさせいるような感じさせられて仕方がない。

そのせいか、俺もだんだん照れくさくなつてきた。

でも、良く見ればこんな学園のアイドルと一緒に行動が出来て、一緒に食事がとれるのだ。

普通の男なら、これ以上の幸せはないと思えるくらいだ。

俺も俺で普通の男だから、心に花を咲かせたような気分になつてしまつた。

今、美鈴を意識していかつて言われて、「意識していない。」

とは言い切れない。

初めて会つた時から結構俺のタイプだつたし、申し分のない相手として理解している。

だから、何か決定的な出来事が起つてしまつたら俺は、美鈴に夢中になつてしまつくなつた気がしてならない。

でも、俺にはそれを妨げるような暑い壁が覆われているような気がして、その先に進むコトが出来ない状態になつていて。愛美的なコトも…。

要するに、素直じゃないつて言つた方が正しいのかも知れない。

好きなのに好きじゃない。そういう変な循環が俺の心を惑わしてしょがない。

この壁を取り除くには何が必要なんだろう。

もし、取り除いたとき俺はどうなつてゐるんだろう…。そんなコトを思つていると、

「お待たせしました～、明太子と～～～です。」

と、今までの思考をかき消す様な店員の声が聞こえてきた。

「へへん～。これ美味しい～」

美鈴は頬を撫でながら味を確認している。

「うん。美味しい～。」

俺もちやつかりと美鈴とリアクションをとつてしまつた。

「あ～、翔平君ほつべ～～～付こ～～るよ～。」

「え、ビビ～～～。」

「じゃあ、顔ちょっとだけ寄せて。」

「うーん？」

ペロ。

「え…？」

「てへへ。翔平君のほっぺた柔らかいね。それにこのマークも美味しいね」

美鈴の舌が俺の頬へと挨拶をしてきたのだ。

俺は動搖を隠し切れなかった。

「うまでやつてぐるなんてつて…。

そんな俺の表情が面白いせいか、美鈴は「ゴーゴー」をしながら笑っている。

頬を撫でてみると、確かに美鈴の感触を感じる。

何と凄まじい開放感。何かに縛り付けられていたモノが解かれるような…・・・そんな感じを覚えた。

「あ、私も明太子付いちゃった。」

何かを訴えるような眼差しが、俺の心を惑わしてくれる。

俺も俺で心臓の鼓動が早まりつつなってきた。

でもまあ、わざわざの『お礼』とこの上なら別に抵抗感は、そういうモノに変わつていいんだわ・。。。

セレジウムの俺は決心した。

「顔、ちよつといひに寄せて。」

美鈴は待つてましたと言わんばかりの笑みで頬をこつこつ近づけてくる。

ペロ。

「えへへ アリガト」

やの側もやの側でむづむづやけや恥ずかしくてたまらなかつた。

でも、あんな田で見られいやあ、さすがに素通りなんて出来ない。

しかも、やつてもひつてお返し兼じのも感じを悪くしちゃうかなとも思った。

俺達は、そんなことなどあまへこ飯の日々を過ぎした。

。



## PHASE-08 テート(前編)(後書き)

今までなかなか書けなくてすいませんでした。これからは、暇を殆ど費やすくらいの気もとで頑張っていきたいと思います。

「あ～お腹につぱー」

美鈴は、お腹を抱えている。

俺も俺で、お腹と心がいつぱーになつた。

「ねえ、翔平君。 手繋いづか。」

周りを見渡せば、手を繋ぐのが当たり前といつたのに見せつけられて、いふみづな気がする。

美鈴は、これに憧れを持ったのか憚る口をなく言つて出でてきたのだ。

「恥ずかしくない？」

さすがの俺もこの時は照れた。

「私は大丈夫だよ。 翔平君が、嫌つて言つたなら無理ことは言わないけど……。」

「全然嫌じやないよーー！ でも、俺でいいのかなーって思つたりやってね・・・。」

「翔平君だから・・・繋ぎたいの。」

俺はこの時でキンとこつまを持ちこなつてしまつた。

そう、とても照れくさくなるような感じだ。

「美鈴がいいんなら俺もいいよ。」

と、頭をポリポリかきながら答えた。

「じゃあ、繫いつか。」

俺と美鈴の手と手が重なった。

美鈴の手は可愛らしくて、幼いような感じのよつとも思えた。

希望と願望に輝いているような手、人の心を見透かすよつ手、美鈴の手に触れただけで色々な感情が湧きあがつてくる。

「どうしたの？ 翔平君。」

「いや、美鈴の手があまりにもかわいいからちょっと見とれてしまつてね。」

「もう、翔平君つたら・・・。」

美鈴はかなり赤面していた。

この表情が可愛くじょつがない気持ちになつてしまつた。

このまま・・・恋人同士になつてもいいかなと脳裏に過ぎつた。

でも、やつぱり心の中でなぜかそれを隔ててしまつ。 何でだろう・・・。

「ねえ翔平君、ここに行つてみない？」

美鈴が差している指の先には、「占い」と大きな文字で書かれたテントを差していた。

「占いか……。」

「翔平君つて占い信じる?」

「うーん……。信じない方かな?。」

「へえへへ。そつなんだへへへ。」

「美鈴は信じる系?」

「うん、信じるよ。だからね、それよつてそのままテンションが上がるか、上がらないかになっちゃうんだよね。」

「でも、占いは全てが当たるとは限らないから、運勢が悪くたつてそんなに考え込む必要はない」と思つたけど……。」

「でも、悪いより良いって言われた方がいいでしょ?」

「んまあ、そうだけば……。」

俺には美鈴の言つてゐる口調が分からなかつた。

占こつてそんなに頭を悩ますモノなのか・・・?。

「翔平君、行つてみよつよ。何か面白いかも」

美鈴は乗り気だ。

「・・・分かつた。それじゃあ、行こつか。」

俺は、彼女の期待に裏切らないよつこと、仕方が無い気持ちで乗つた。

その言葉と共に、俺たちは、暗いテントの中に足を踏み入れていつた。

「いさんてむせー。」

俺たちはテントの入り口付近のカーテンらしきモノを退けた状態で挨拶をした。

「こりつしゃー。」

とてもお淑やかな声だ。

この声だけで、心身共に癒してくれそつな・・・そんな感じを覚えてしまつ。

それに、自分の憧れのおばあちゃん像をも生み出すよつな情操のよくな気分にもなつてしまつ。

田は、透明な緑色を帯びてゐる。

その田は、今まで何人の人々を見てきたような田、相手の感情をも透かさせて見るような田、その人の未来像をも見れるような田であるように見えてくる。

顔のしわは、今までの人生の中で、苦難を乗り越えた証のようにも見えてくる。

そう、細木數子よりもむちやくちやおつとりした感情の人だ。

入り口から入つてすぐに、椅子一つとその前にカウンターのような長テーブルが用意された状態となつていて、その長テーブルの先にお婆さんが座つた状態となつてゐる。

「宜しくお願ひしますう。」

美鈴はお辞儀をして答えた。 どうやら美鈴は、はりきつてゐっぽい・・・。

美鈴の挨拶と共に、俺たちは椅子に座つた。

「今日は何のよひじや？」

「私たちのこれからのこととか、私たちの相性とかについて教えて頂きたいのですが・・・。」

美鈴は手と手をかね合わせ、淡々と述べた。

俺はそんな美鈴の姿を、ただ呆然と見つめる口トしか出来なかつた。

「相性は言つまでもなく抜群に良じや。友達同士、それ以上の関係でも言つ口トないわい。」

お婆さんは、一人の顔をじつと見つめながら答えた。

「そりなんですかあ」

美鈴は、一人テンションが高くなつてゐる。

「そちらの方は、どうやら恋愛には困らんよつじや。容姿、スタイル抜群。頭脳明晰。澄んだ心の持ち主。ここまで持つておいて、未だに恋愛の一つもしたないなんぞ、勿体無い口トじやわい・。このお方は、世の男性の憧れの的となるお方じやからな・。・。じゃが、これだけは、聞きなされ。恋愛するのは勝手じや。じゃが、その相手をよく選ばなければならんぞ？世の中には沢山、濁つた心の持ち主も存在するんじや。ソナタを遊び半分で付き合つ輩がいても不思議じやないわい。そやつらに、惑わされるないことのないようにじや。もし、その悪い輩と相手をしてしまつたら、ソナタの心も濁つてしまつじやろづ。目標物を失い、縛られるコトのない世界にへと足を踏みいれてしまつじやろうに・・。・。そうなれば、ソナタはソナタで無くなる。そのあまりにも快感な世界を体感してしまわぬように・・。でも、その男性なら大丈夫じや。その男性は、とても温厚で純粹じや。このワシが保障する。とても良いお方じやよ。」

美鈴は、うんうんと頷いてゐる。

「恋人関係同士になれば、そなた達は幸福になるじゃね。じゃが、それまでに問題があるんじゃけどな・・・。」

「問題って何なんですか?」

美鈴は、とても真剣な目で問い合わせている。

「それは、そちらの男性にあるんじゃ。そちらの男性には、どうやら自分の気持ちを隔てているモノ・・・これを解決するには、ちと大変じゃろう。それは、自分が一番知っているじゃろうに・・・。じやが、それを切り開いたそちらの男性には、思いがけない未来が待ち受けているじゃろう。その未来こそ、そちらの男性が求めていたモノ。そして、かけがえのないものへと変わっていくのじゃ。」

「・・・。」

俺は、閉じない口を感じながらも絶句した。

この俺の気持ちをズバッと当てたのにほ、さすがに驚いた。

それを一緒に聞いていた美鈴も美鈴で、寂しげな表情を見せてくれている。

美鈴にははどうやらその『隔てているモノ』といつのが想像がついているようだ。

「じゃが、その隔てている『モノ』はじゃな、時が経つにつれ、どんどん浄化していくじゃろう。要するにじゃ、焦らず、時間をかけてゆっくりと時を過ごせば何とかなるものじゃ。ソナタにとつて、

幸運が起きたことを祈つておるがよ。」

お婆さんは、自分の言つたかつた全ての言い分を言つて終えると、一ツ「コリ俺たちに一ツコリ微笑んだ。

「お婆さん、今日はどうもありがとうございました。お婆さんは、私今まで見てきた占いで、最高の占いですよ。その後のアドバイスも良かったですし・・・本当にありがとうございました。」

美鈴は、いつも間にかテンションが戻つたようだつた・・・いや、そろいう素振りを見せていて過ぎなかつた。それは、この俺でも分からせる程のモノだつた。

「そなた達に、『J冥福を・・・。」

お婆さんは、そう言つて祈願していた。

俺も俺で、美鈴がテントから出た後、深いお辞儀をしてその場を去つた。

「今日は楽しかつたね。」

あの後、俺たちはゲーセンやら、洋服屋やらに寄つて、バスから学校まで来て、それから歩き状態となつてこる。

田は、もう傾きかけている。

夕焼けを見れば、さつきまでの事々が懐かしく、脳を刺激してくれる。

「ねえ、翔平君・・・。」

美鈴は、納得のイカナイ表情を見せた。

「何?」

「俺は何となく何が言いたいか分かつた。この美鈴の表情からなら恐らく・・・。」

「さつもの占いホント当たつてたね。私もビックリしたよ。翔平君も当たつてた?」

やつぱり、占いマニアだった。

「当たつてたな・・・。」

「俺は、限りない遠くの風景を見ながら答えた。

「それじゃあ、やつぱりあの話は・・・。」

美鈴は美鈴で下を向いてしまった。

「うそ、そつくりそのままだね・・・。」

美鈴はまだ下を向いている。何かの答えに辿り着いて、落ち込んでいると言つた様子だ。

「もしかして・・・、その『隔てているモノ』って愛美さんのマント

なんじや・・・。」「

美鈴が何やりボソッと言つた。

「え?」

「ううん。何でもない。えへへ」

美鈴はよつやべトを向くのを止め、しつちを向いて、ニコニコしていれる。

しかし、その笑みは造り笑顔となつていた。

「今日は、とても楽しかった。しかも相手が翔平君ですごく良かつたよ。今日はホントにアリガトね。それじゃあ、また学校でね! バイバイ。」

「あ、ちょ、ちょつと・・・。」

俺は、美鈴に手を差し伸ばした。

でも、もつ美鈴は俺の隣にはいなかつた。

25程遠くを見ていると、美鈴は、何かモヤモヤを胸に秘めたままのような感じで、足早に去つていつゝにも見えた。

## PHASE - 09 テーブル（後編）（後書き）

1回消してしまったんで、もう一回書くのに時間がかかってしまいました。

「ふんふんふん」

「美鈴、今日はやけに机嫌だね。鼻歌まで歌っちゃって。」

「別にこつも通つだよ」

「はは～ん、わいは、例の男の子のコトでしょ？」

「わい、香織つたら～！ 翔平君とせ、そんなんじやないつてばー！」

「あ～あ～美鈴さん、そんなこといつぱりやつても良かつたのかな～？」

「・・・やつぱり前言撤回でお願いします。」

「分かれば直しこ。」

食堂では、一人の女性の会話が進んでいく。

「しつかし、あの不器用な美鈴が異性の子とそこまで発展していくなんてね・・・。その翔平くんって子、美鈴を何か惹きつかせるモノでも持つてるんでしょうにね。」

「は、発展つて……。」

「それで、どうまでいったの？ キス？」

「そんなレベルじゃないつてば……。」

「え？ 何々？ まさか、それ以上の関係まで……。」

「う、違つてばあ！ そこまでこつこつないつて口上でだよ……。」

美鈴はかなり赤面している。

「あは・・・、やうだよね。 ベックリしあひつた。」

「香織つたら、気が單す、だよ～～・・・。」

美鈴は辺つを見回してくる。

「じゃあ聞くけど美鈴はキスとか、それ以上の関係は考えないの？ 女の子なら普通、そこまで意識するもんだよ？」

「や、それは……。」

美鈴は何やらモジモジしている。

「だ、だつて～・・・、何か恥ずかしいもん……。」

「あ～あ～あ～美鈴さん。 あなた、良くそこまで言えるものなのですね。」

「え？」

「誰だったかなあ。昼食の時、例の男の子の頬にペロペロしてた人は。」

美鈴の顔が驚きから徐々に赤面に変わっていく。

「香織ー！ な、何で知ってるのー？」

「あー、何ででしょうね。」

とてもさり気ない返事だ。

「ううう・・・、恥ずかしい・・・。」

「まあ、アタシの情報網はスゴイですから」

自信満々の笑み。

「聞かないコトにしておきます・・・。」

美鈴は、何かを悟ったのか観念した。

「へえー、でも、美鈴から誘つたんだー。スゴイじゃない。」

「何か私ね、翔平君といふと、人が変わると云つが何といつか……。そんなんになつちやうの。」

「それはね、美鈴。好きな男の子だからそつなかやうのよ。自分を良く見せたい、自分にもつと注目して欲しいといつ欲が出てきて、そつなつてしまつものなの。」

「……私、翔平君に『私、翔平君にしても興味を持つてしまつた』と言つてしまつた。だけど……。」

「好きなのね？」

「……うん、好き。」

美鈴は、少し照れている。

「美鈴、やつと自分の言葉ではつきり言つたね。『好き』といつことを。内面で思つていても、言葉に出して言つてみるとちよつと違う風にも思えるのよ。人間、耳があるから、聞いて実感しないと分からないコトもこつぱいあるのよ。」

美鈴はうとうとう頷いている。

「告白したら？ その誘いを受けたつてコトは少なくとも、『付き合つてもいい』つて思つてゐますよ。」

「それは、無理かもしけない……。」

今の美鈴には、この提案を素直に受け入れるコトが出来ないみたいだ。

そして美鈴の顔がだんだん険しくなる。

「何でそう思うの？」

「彼には・・・、愛美さんがいるから・・・。」

「愛美さんって？」

「彼の幼馴染の女の子。二人いつもいつも仲が良いの・・・。」

美鈴はこの証言を語ったのと同時に、あの『壁』というモノまで脳裏に浮かんだ。

「だから、どうせダメなの・・・。幼馴染つていうコトで、それなりの時を一緒に過ごしてゐる・・・。私には・・・。」

美鈴は、あの時のモヤモヤが言葉と化して出てきた。

「だから何？」

「え？」

「恋愛に至るまでには、お互いに過ごした時間の量が必要なの？  
美鈴、その考え方いわよ。恋愛って語るのはね、今まで過ごした時間の量よりももっと必要なモノがあるのよ。美鈴それが何か分かる？」

「相手を良く理解する」と？」

「少しおしゃいわね。」

「じゃあ、何？」

「他人よりもその人を強く想うコト（量）。いくら過ごした時間が長いからって、いくら相手を良く理解したって、最終的にはその人をどれだけ想つているかになる。他の人よりも、自分が強く想う。そして、いざれそれは、何らかの形で相手に伝わる。心が揺らいでる人にそれが伝わつたらどうなるか分かつてゐるわよね？」

「……。」

「その一人つて付き合つてゐるの？」

「付き合つてはないみたいだけど……。」

「だつたらいいじゃない。もし、その愛美さんへの想いが強かつたら、美鈴の誘いを受けてないと思つよ。」

「それは、ただけど……。」

やはり美鈴は、まだ『壁』という文字を背負つてゐるようだ。

「美鈴つて上からサイズ何だつたつけ？」

「えへつと、上から、『88』『59』『87』で身長は162cmだつたよ。」

「さすがは、アイドルね……。美鈴、もっと自身を持ちなさい。アナタこの学校のアイドルなんでしょう？逆に考えて、アイドルを振

る男性なんて考えらると思つへ。」

「好きでアイドルになつたわけではないんだけど……それに、アイドルだからって、100%成功するとは限らないよ。みんなそれぞれ好みのタイプつていうものもあるし……。」

「成るほどね。美鈴はそこまで考へてるんだね。それが美鈴の良い所でもあると思つよ。美鈴がそこまで考へてるなんて思わなかつたから、ここまで簡単に言つちやつたよ。『ごめんね。』

「ううん、謝らなくていいのよ。私が、恋に臆病なばかりだから。…。それに、私、A型で心配性だし……、根に持つちやうし……。」

「美鈴A型だつたんだね。A型か……、それならじょうがないわね。あ、ちなみに私はO型ね。」

「香織O型だつたんだ～。あ、言われてみればそんな感じ……だね。何かO型つて大らかな人多いし、喋りやすいから私好きだな」

「A型はどつちかつて言つと内氣が多いからね～。そんなO型とA型がくつづくと良くなつて言われてるみたいだしね。」

「じゃあ、私たちつて会つて言つて入つてるんだね。何かこ～いうのいいよね。」

「うん、やつだよね。あ、その例の男の子の血液型は何なの？」

「分かんない……。今度聞いてみよつかな」

「聞いたら教えてね。私こりいうの興味持つちゃうタチなんで。人の誕生日、星座、血液型とかね。」

「うん、分かつた。聞いたら教えるね。」

とまあ、血液型関連の話に移つていってしまった。

と、ここでようやく本題に入つて、

「美鈴、もし、美鈴が『今の関係よりも進展したいと強く思う』なら、『告白』を考えた方がいいと思うよ。私が言えるのはこりまでだけになつちやうけど・・・。役に立たなくてゴメンね。」

「うん。香織はすぐ役に立つたよ。私も、もう一度自分と向き合つてみるようにするね。今までいいのか、それとも・・・ってね。あと、香織の助言で今日はむちゅちゅくちゅく氣が楽になつちやつたからね。感謝してる。」

「美鈴、今はそりいうモヤモヤがあつてしまふがないんだよ。それがあるからこそ、恋愛つていうものが成り立つんだからね。頑張つてね。これからも美鈴の恋、応援する。」

「うん、色々と香織ありがとう。私ももう少し考え方直すね。今日はホントに相談に乗つてくれてありがとうね。」

「いえいえ。あ、そろそろ時間だね。じゃあ美鈴、またね。バイバイ。」

「うん、バイバイ。」

これによつて美鈴の心はどう変化したのだろうか。

そして、これから行動をどう取るところのだろうか。

果たしてこの先には一体何が・・・。

PHASE-10　迷の想い（春風美鈴編）（後書き）

ほとんど会話だけになってしまった。

## PHASE - 11 テスト返し

「さ～これからテストを返すぞ～。心してかかるよ!」

「無音にも響くこの声…あの人しかいない…。

「では、出席番号順に取りにきてちよ。」

退屈」と、D.S先生だ。

「今日も先生ノリノリだね。」

「いや、あれはノリノリというか、俺たちを見下してこるよつこしか聞こえないが…。」

俺たちは先生の大げさな身振り手振りが大きく目に入っていた。

「でも、あ～いう先生って何か憎めませんよね。」

「憎めないといふか…、呆れるといふか…。」

美鈴は美鈴で、困った笑みをしてくる。

徐々に自分の順番が迫ってきていく。

たつた1分くらいしか待たないのに、それがスローモーションのように微妙に長く感じてしまうがない。

「私今回手応え無かつたからヤバイかも…。」

「私もです。入学してから全然勉強に身が入らなくて…。恐いです。」

「人は一人して、俺の今の心境をあざ笑うかのよう」、二人の表情と二人の言動が一致していない。

何か、変な気持ち…。

と、ここで俺に順番が回ってきたみたいだ。

俺は、恐る恐る教卓へと近づいていった。

返ってきて欲しいような…、返ってきてほしくないような…。

微妙な感情が、さらに脳を刺激する。

「お、君は確か…。転校生か？」

「岸田翔平です！　いい加減名前覚えて下さい！」

「あ～あ、そうか、そうだったな。」

悪気があるのか、ないのかホントに分からぬ先生…。

それは、ともかく先生から手渡されたテストを見た。

「・・・。」

言葉が出ない…、」の点数。

「君の頭大丈夫なのかなあ～？」

グサツ！

アンタに言われたくない…。

しかも嫌みつたらしい言い方。

「その点数からすると、学年順位は…どうだうね。」

グサツ！グサツ！

考えたくもない現実…。

ホントに悪氣があるのか、ないのか分からぬ。いや、でも悪氣ありそう。

「翔ちゃんどうだった？」

「翔平君、どうでした？」

グサツ！グサツ！グサツ！

二人一緒に聞くなよ…。

「ノーノメントで。」

「あ、まさか翔ちゃん、またやらかしたんだね。ホンシットに成長しないんだから。」

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

「翔平君、前からこんな感じなんですか？」

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

『こんな』つて…。

「そうなのよね。中学校の頃からそれなりに勉強してるくせに報われてないんだよね。」

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

『そうなんですか…。』

「良い時もあるんだけど、でも悪いときが多いから、見てる私が呆れちゃうって感じなんだよね。」

グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！グサツ！

「可愛いそうな翔平君。」

グサツ！

ホンツトに俺可愛そりつ…。

先生にあれだけ言われた後に、またこれだけ言われる…。

久しぶりに、精神崩壊の危機に直面しそうになつた。

「あ、私の番みたい。行つてくるね。」

と言い残して、愛美は教卓へと歩んでいった。

（ふつ、せいぜい俺と同じ悲しみを味わうんだな。）と悪魔みたいなコトを思つてしまつた。

どんどん、愛美は先生の方へと到達しようとしている。

そして、先生からテストを受け取る瞬間に、

「あ、えーと君は確か、バ・カ恋・学・見だつたか？」

と何とも言えない表情で言つている。

「華恋・愛美です！ もつ先生つてば、わざと言つてるんですか～

！？」

「いやいや、メンメン。またスイカやつたな。」

先生は先生で、頭を搔きながら苦笑いしている。

「もへ、しつかりして下さいよ。」

愛美の機嫌のパラメータが徐々に急降下している。

「ああ、これから氣をつけるよ。多分……。」

「多分だけ余計です……。」

愛美はテストを引っ手繩つて、自分の席の方へと足を進ませている。

「愛美どうだつた?」

俺は、薄気味悪い笑みを浮かべながら問いかけた。

「どうもしない。」

愛美は相当機嫌が悪いみたいだ。

「はは～ん、さては悪かったんだる～？？」

「別に。」

「認めるよ～。」

「わづ～！ つるわいわね～！ アンタには関係ないでしょ……。」

怒り心頭の愛美。

「ま、愛美……？」

俺はマジ焦った。こんな愛美久々だったからだ。

「あ……今は話かけないで……。」

やつやく落ち着いたみたいだ。

「翔平君、ちよっと言い過ぎましたね。」

（あの～、やつきアンタ等に思いつき言われたんですか～～）つて内心強く思った。

「あ、そろそろ私の番ですね。では、行きますね。」

愛美と違つてお上品な仕草が何とも言えない。

愛美は愛美で何やらパンパンしてくる。どうしたのだろうか……？

美鈴の行く姿に田を追つている男子生徒が何人か見られる。  
その歩き方は、とても品があつて、アイドルそのものと言える。

「お、君は確かに新入生代表の、春風・バス図ではないか。」

この言葉が自然的に入ってきた男子は、先生をギロと、殺氣満ち溢れた顔で睨んだ。

「春風・美鈴です…。」

この視線を目のあたりにした先生は、焦ったのか、

「いやいや、スマシスマシ。美鈴だったね。許してくれいー。」

と握りでいるよつて謝つている。

「…・名前を間違えるなんて誰にでもあることですか…。」

美鈴の冷ややかな目。

さすがの先生でも、この時ばかりは悔いありの瞬間にすぎなかつた。

「美鈴へ、どうだった?」

「どうもありません。」

膨れつ面の美鈴。さすがに機嫌が悪いみたいだ。

「まさか美鈴も、めちゃめちゃ悪かったとか?」

「別にそんななんじゃありません。」

「じゃあ、変なことやらか……」

「ちよつと静かにして頂けますか?」

美鈴の生命力に欠けた瞳が何かを物語ついていた。

愛美も愛美であっだし、美鈴も美鈴であっだし、俺も俺でこっだし、良くなきゃ。

「それでは、テストを返したコトだし、授業に……、

とその時、教室の扉が開いた。

「おいで。彼女のヤマンバさんからの電話だぞ。何やら急の用うしぃ。」

何やら、分けの分からぬハゲ教頭が出てきた。

「あ、これはこれは教頭。お久しぶりです。」

「いや、こつも余つてゐるだおうつて」。

教頭も教頭でため息をついている。

それと同じくして、ハゲもハゲで乗り気のない光のオーラを漂わせている。

「では、既の諸君。皿籠とこう形で、宣じへ～～。」

と、簡単に言い残して、それへと出て行った。

ホントに軽くて、イマイチつかめない先生だ。」

「何だかな～～。」

このユーモアすぎる先生を目の前にして、俺はどうもなれない感じになってしまった。

PHASE-11 テスト返し（後書き）

3日～9日にかけて更新しようと心掛けております。

「え、美鈴この前のテスト学年順位1位だったの？」

俺は、驚きの声と共に声が大きくなってしまった。

「声がでかいです…。」

美鈴は、何とも言えぬ表情で辺りに視線を漂わせた。

「あ、ごめん…。それで、5教科何点だったの？」

「確か、495点だったと思こます。」

「…。」

この凄すぎる現実に、俺は圧倒された。

そう、平均が99点だなんて…。

「翔平君は、何点だったんですか？」

「370点…。」

この凄すぎるモノを突きつけられて、俺は良く言えたと思つ。

今、俺たちは一人で食堂で食事を取つてゐる。

周囲には、全校生徒の約60%は、この食堂にいる状態となっている。

他人からの視線は？と聞かれれば、ないとは応えられない。

首をかしげている人や、嫉妬の表情を思い浮かべている人など、多種多様の喜怒哀楽が見られる。

しかし、美鈴の態度は、どうやらプライベート用と学校生活用と分けて良いらしい。

そりゃあ、こ～いう人は少なくはないけど、でも、この変わりぶりを見ていると、何か違和感みたいなモノを感じてしまうがない。

そうこう思つてみると、

「あれ、愛美さんじゃありませんか？」

美鈴の視線を俺も同じように追つていいくと、そこには、愛美と男子生徒が楽しそうな話をしながら隣合わせになつて歩いている。

「愛美さん、楽しそうですね。」

「どうだかね…。」

「いいんですか？」

「べ、別に俺は、アイツが誰と、どういチャつこうが関係ないし……。」

果たして、この言動と内心はぴったり重なるのか？

それとも……。

「それにしても、愛美さん随分と楽しそうですね。」

言われてみれば確かに……。

あの一人以外の立場から見たら、思いつきりカップルと思える人が普通であろう。

そう、それくらい良い感じに見えるといえるのだ。

「あの二人付き合つてるんでしょうか？」

「さあな。でも、あの愛美の可愛さなら当然と言えるべきだしな。」

「確かに、中学生時代に吉田を何回かされたつて言つてましたしね……。」

「人数は覚えてないけど、全校生徒の約70%らしいだらしに。」

「へえ……。それはすうじですね……。」

いや、美鈴の方もスゴイと思う。

ふと、携帯の時計を見てみると、もう授業の始まる2分前だ。

「あ、そろそろお休みが終わっちゃいますね。」

「やうだね。そろそろ行こうか。」

「うそ。」

いつもよく、長いよつで短いよつな休みに終止符が打たれた

「えへと、では、不定詞は……。」

と、先生の声が入ってくるよつな、入つてこないよつな……。

授業は、かつたるい。

いつもまでの時間が愛おしくてたまらない。

友達と話をしたり、遊んだりと、このコトコのある時間が。

外を見たり、眠そうな面を見せたりと、俺はやる気ナッシングのモードに入っている。

美鈴は美鈴で、真剣に集中して授業を受けている。

この集中力のオーラを感じると、『さすが』とこつ言葉しか出ない。

そもそも、愛美は愛美で、どうやら先生に見られぬように、机の方へ携帯を忍び込ませていじりっこる。どうやら誰かとメールを打っているようだ。

けど、1件1件のメール送信が終わる度に、今行われている授業に、説教的に受け入れているように見える。

この仕草は、やはり賢い＆器用な者しか出来ぬと思った。

そうじつ思つてゐる内に、俺はだんだん意識が遠のいていった。

「・・・くん。」

「・・・ちゃん。」

「・・・へい・・・くん。」

何か天から生優しい声を感じる。

「しょ・・・ちゃん。」

「しょ・・・ちゃん。」

その声は、だんだんと大きくなっている。

「翔平君ー。」

「 もう、翔ちゃんいつほー。」

「 ・・・。」

気がついた時、一人の女性がこっちを向いて立っていた。

「 やつと起きましたね。」

「 チャイム鳴って、MRも終わって、その間ずっと寝てたんだよ?」

「 あ・・れ、も・・う放課・・後?」

俺は、田を擦りながら辺りを見回した。

「 まだ寝ぼけてるみたいですね。」

「 ほひ、翔ちゃんシャキッとなれ。」

俺の意識がだんだんとハッキリしてくる。

「 では、私は先に帰らせて頂きますね。」

美鈴は、机の上に置いてあるカバンに手を置いた。

「あ、ああ。」

「春風さん、また明日学校でね。」

「はい、では失礼します。」

美鈴は、やる事を済ましたせいか、さつさと帰つていった。

「じゃあ、私たちも帰ろつか。」

「・・・え？」

「『え』つて何よ？」

「あ、いやいや、何でもないよ。」

俺は、この状況に疑問を抱くコトしか出来なかつた

「今日は何か心地よい天氣だね。」

空は、雲一つ見かけない。

そして、自分達の頬をかすれる風が本来の自分を取り戻させるよくな感じになつてしまつがいい。

季節はもうすぐ夏に傾こうとしている。

その準備のせいか、虫たち、木の葉たちが次々と色々な準備をして  
いる「トガ田てつべ。

「ねえ、翔ちゃん…。」

「何?」

愛美が何やら、また思いつめた表情を見せてくる。

「もしかあ、好きな人と一緒にいたら何したいと思つ?」

「あ、急にじりじりしたんだよ?」

いきなりこんな事を言われても……つてこうつ情しか感じると、  
しか出来なかつた。

「私わあ、ホントは今好きな人がいるんだよね……。」

「え・・・?」

「これは、やつぱつと叫びづきか、何と叫びづきか……。

「え、誰々?」

想像はつくけど、やつぱつ聞いてしまつ。

「ひ・み・つ」

「いいじゃん、別に教えてくれたつてさ～。俺たち友達だろ？」

「と、ともだち……。」

愛美は何やら下を向いてしまった。

「もしかして、今日の昼一緒にいた人なんじゃない？」

内心、ちょっと複雑な面持ちだ。

「あ、見てたの？」

「いや、だつて普通に田に入ってきたよ……。」

「どうやら、あの時の愛美は俺たちに気付いてなかつたらしい。

「う～ん…。どうだろね。」

「いや、その人しかいないじゃ～ん。しかもちょっと大人っぽかつたし。」

「う～んど、アノ人はね、星垣先輩。（ほしがき・ゆうが） 星垣・悠也先輩。（ほしがき・ゆうや） 同じ委員会仲間なんだよね。」

「あれ、愛美、委員会に入つてたんだ？」

「あれ、言わなかつたつけ？うん、入つてるよ。」

「へえ～。」

「それでね、ある時一緒に委員会の仕事をして、色々なコトを教えてもらったり、親切にしてもらったりしてくれてるの。」

「今日も、その委員会の仕事で一緒にいたわけ?」  
「…」

「ううん、今日は仕事ないよ。一緒にお昼ご飯食つて、それで一緒に校内をブラブラしてただけだよ。」

「や二日で進展してるんだ。」

俺は、内心ちょっと変な気分だ。

「うーん…。そーいう風に見えちやうへー。」

「いや、だつて一緒に飯食つたり、一緒に行動してたりしたら誰だつてそーいう風には…。」

「だつたら、翔ちゃんもその中に入っちゃうね。」

「俺は、まあ…、单なるアレであつて…。」

「ふーん、『アレ』で」おかすんだ。」

でも、言われてみれば確かに。

「付き合わないの? あんなにカッ『良くて、優しそうな人と。』

「どうだろね…。そんなに聞きたいの?」

愛美は向やう寂しそうな眼差しを俺に向かっている。

「……まあ、こいつ話は一応聞いてみたいじゃん。」

「何で？」

「今日は、その人を受け入れるんじゃないかなって思って。」

「だつたひづる。」

「え……？」

「受け入れちゃダメなの？」

愛美はさう思いつめた表情を見せる。こんな愛美は初めてだ。

「な、何で俺に聞くんだよ……。」

「だつて、翔ちゃんこまでしつこく聞いてくるんだもん。何かダメなのかなって思つて。」

「べ、別にそれは、愛美の自由だろ？」

「……確かにそうだけど……。」

「で、どうなんだよ？ そりんといひハッキリしなやあが。」

「ハッキリしないのは翔ちゃんの方でしょう……。」

愛美は向やうボソッと呟いた。

「え・・・。」

何だらうなこの微妙な気持ち。

「実はね、今週末に先輩の家に誘われちゃったんだ。」

愛美は懺悔を行つてこるように見えてしまう。

「あ、マジかよ?」

「うそ。それでね、今びつよつつか迷つてたんだよね…。」

「まだ、付き合つてもないのに、それつて早くない?」

「うそ、私もそう思つ。でも、何か『言いたい』とか、色々な『』とかしたからつけて呼んでくれたみたい。」

「『色』々な『』つて…。」

この愛美のエロイ身体を見たら、その星垣先輩とこう奴は一体どういう行動に踏み切つてしまつたのだろうか…。まさか…。とは思つてしまつた。

俺は何で言つたらいいか分からなくなつてしまつた。

「はあ、どうしたらいいんだろ…。翔ちゃん家なら、喜んで行くの」「…。」

「…。」

「この発言は果たして何を意味しているのだろ？」「

「愛美が、その人の『ト』を好きだつたら、行けばいいし、好きじやなかつたら行かなくていい。『ト』だと懶りよ。」

「難しこじとを言つんだね…。」

いや、普通に難しくはないだろ？

愛美は、セレクトのをせつしだがらない。なぜだろ？…。

「あ、そうだ、そいえば翔ちゃんのメールアド聞いてなかつたよね？ ねえねえ、教えてよ。」

「…？ 別にいいけど…。」

何で急にこんな話になつたんだろう、そういう疑問が抱く。

ついで、俺たちは無事にアドレス交換を果たした。

「でも、急に何で俺のアドだなんて…？」

「…、何か聞いてみたかった。色々と相談相手にもなるし。」

そーいふことか。

「んで、どうするんだよ？」

「もう一回家に帰つて決めてみる…。」

「…・・・わい。」

俺は、どんどん今の空気が重くなる」とこ声がつづく。

気がつくと、もうそよ風公園に着いている。

日は傾き、天を見ると、漆黒の闇に包むような気配を見せてくれる。

電灯もつき始め、微妙な橙が今この世の中の未熟さを表している  
よつにも見えてしまつ。

「ううで、お別れだね。」

空は、もうすぐ闇に包まれる。

「翔ちゃん、もう一回最後に聞くけど『好きな人と一緒にいたら何  
したい?』」

愛美はじつといつをつめている。

「人に聞く前に、まず、自分から語りもんなんじゃない?」

「翔ちゃんつてホントにいじわるなんだね…。」

「いや、理由だ。」

「分かったわよ……。絶対翔りやんも言つてよ、もじ言わなかつたら  
絶交だからねー。」

「お、おひがつた。」

「それじゃ、言こまく……。『イチャイチャしたり、色々なコトをし  
た』ことですか……。」

愛美はむりやりへやめ頬を赤くしてくる。

「『色々なコト』って?」

「女の子にや～こづ『アコニ』のやぢアコニの? 翔りやん最っ低だよ……。」

「あ、『メン』『メン』。空氣読めなかつたね。」

「ホントだよ……。」

「じゃあ、俺はこれど。」

「じょりかひよーん。」

「分かったよ、俺は『愛美と曰じ』とこひとで。」

俺は、この時一つの意味があることに気がついてしまつた。

「ふ～ん」

「」の答へでよかつたのかな。

「じゃあ、翔ちゃん、また学校でね。バイバイ

「」の愛美は二つもの愛美に戻っていく。

「うん、それじゃあ。」

勿論あの話の「」は忘れてない。

果たして、愛美は「」のだらうか…。

やつと書けました。結構月日が経ってしまったので、少し違和感を感じるかもしれません、ご了承下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7997a/>

---

本命は・・・

2011年2月21日19時20分発行